

# 周公避居説小考

——鄭玄以前の周公避居説——

はしがき

鄭玄は『尚書』の一篇、「金縢」解釈に周公避居説を構想した。ただ鄭玄より以前に、周公の避居をつづる文献、また「金縢」解釈にそれを装置する学説・解釈者も存在していた。かくて従来、そのような避居説の延長線上に鄭玄のそれは位置づけうるとされているようである。だがしかしこうした認識は、じつは成立しえないものであった。鄭玄のそれは、それまでの避居説とは一線を画す解釈であったのである。

小稿は、鄭玄以前の避居説を詳細に検討することを目的とする。このような作業があつてこそ、われわれは鄭玄のその特異性をあぶりだしうるのである。

間嶋潤一

## 一 鄭玄の避居説

まず鄭玄の避居説を確認しておこう。小稿の目的が右のようである以上、われわれはつねにそれを視野に入れて論じなければならぬからである。すなわちそのあらましは、つぎのようである。

武王の三年の喪期をおえたとき、周公は十三歳の成王の摂政に就こうとする。そうした周公を管叔・蔡叔など（以下、管蔡とよぶ）は、「流言」による讒言をする。成王に疑謗の念を向けられた周公は、成王を避けて京師から東都に居住するのである。その避居の二年め、周公の属党は無実の罪で逮捕される。周公は属党を傷み、また成王の過酷な仕打ちに異議申し立てをおこなうために、「鷓鴣」一篇を成王におくる。しかしそれは成王の疑謗の念をいっそうつのらせる。避居して三年め、天は疾風雷電の異変をくだ

す。これを契機に成王は、「金縢の書」を開封する。武王の病に際しての周公による穆卜の書を発見するのである。

かくて成王は、さきの異変を天が京師不在の周公の徳を顕彰したものと認める。疑謗の念をあらためて周公を京師に迎えることを天は命じた、と成王はとらえるのである。かくてそうした天命を体したことを天に告げる郊祭をおこなう。すると天は嘉祥をくだす。このようにして避居三年、京師に帰還した周公は摂政に就く。そしてすぐさま管蔡らを誅伐する東征にでかける。避居三年は居攝元年であるとともに、まる三年に及ぶ東征の一年めでもあったのである。

このような周公のいわば受難と、それからの解放とを、われわれは鄭玄が構想する周公避居説とよぶのである。ただ小稿でとりあげる諸説は、必ずしも讒言・避居・「鴟鵂」制作・天の異変・「金縢の書」開封・郊祭・天の嘉祥、そして成王による周公迎候と、周公の帰還・摂政就任・東征という鄭玄の避居説のすべての構成要件を備えているわけではない。またその順序も鄭玄と著しく異なるばあいもある。これらに共通する一点は、讒言による周公の避居である。われわれは小稿において、そうした諸説を避居説として論ずるのである。

## 二 『墨子』『史記』の避居説

『墨子』『耕柱篇』にいう「古者周公旦非閔叔、辞三公、東處於商蓋」が、文献において確認できるもっとも早い避居説である。これからとりあげることにしよう。

まずこのなかの人名・地名をあきらかにしておく。「閔叔」は管叔である。「商蓋」は商奄につくるべきである。奄と単称されるばあいもあるそれは、成周の東にある魯をじっさいは指すのである。<sup>(3)</sup>すなわち周公は管叔に讒言され、三公の職を辞して商奄（以下、奄とよぶ）に避居したというのが、『墨子』の避居説なのである。

このような所説において、周公の避居は管叔の讒言を契機とするものであること、だがその地は鄭玄が設定する東都ではなく奄とされていることにまず、注目すべきである。そしてそれらの時期については、つぎのように推測できようである。

周公が三公のなかで、太子（のちの成王）の守り役にあたる太傅に就いたのは、武王に要請されたことであった。その辞職に追い込まれるには、讒言のまえに武王の崩御があつてしかるべきである。周公は篡位の野心ありというのが讒言の内容であることは自明であるからである。すなわ

ち讒言・避居は、武王の崩御ののちのことと認めうるのである。ただそれらと、翌年の成王の即位との前後関係はよくわからない。

『墨子』の避居説が以上のようにであると、われわれが最も注目すべきは、周公の摂政就任をめぐるそれが説かれていないことである。『墨子』においては、周公の摂政就任と管蔡の讒言とは関連づけられていなかったのである。

さてつぎに周公の避居を装置するのは、『史記』の「魯周公世家」である。ただそのまえに司馬遷は、武王の病に際して、周公がその穆卜の書―「金縢の書」を著したこと、武王の崩後に摂政に就いた周公が管蔡の「流言」に遭い、かくてそれらを誅伐するために東征したこと、居攝が七年に及んだことなどの経緯をつづる。われわれはさきの『墨子』を想起しよう。その所説と異にして、ここでは周公の摂政就任と管蔡の讒言、さらには東征とが一連の事件とされているのである。司馬遷はすでに確立していた今文『尚書』の「金縢」「大誥」などの諸篇をそのように解釈して、管蔡の讒言をめぐるくだりには周公の避居を装置しなかったのである。しかし司馬遷は、避居の事実を否定はしなかった。それには別なる契機をあたえるのである。すなわち「魯周公世家」には右の叙述のあと、「初」―これよりさき

とことわったうえで、その契機となる以下のような成王の病をめぐるエピソードを示すのである。

幼い成王が病となったとき、周公は自分の爪を切り黄河に沈めて神に祈願し、その祈禱文を府庫に納めた。かくて全快した成王は政治をとった。このような叙述のあとに、司馬遷は「人或譖周公、周公奔楚。成王発府、見周公禱書、乃泣、反周公」とつづける。ある人の讒言をうけた周公は楚に避居する。そのうち周公の祈禱文をみつけた成王は涙ながら周公を迎えた、とのべて避居を装置するのである。おなじ『史記』の「蒙恬伝」にも示される、こうした避居説についてわれわれが論じなければならないのは、つぎのようなことである。

司馬遷は『史記』を著述するにあたり、「罔羅天下放失旧聞（自序）」という態度をとった。おそらくその避居説は司馬遷の創作になるものではなく、いまはつまびらかにしない、原拠資料があったにちがいない。ただそれが作成された経緯については、左の二点に注目するとあきらかとなるはずである。命乞いの祈禱文を府庫において発見し、かくて周公の真意を悟るという設定はあきらかに「金縢」の借用である。このことにまず注目しよう。そしてもう一点は、その時期の叙述である。成王が幼いときとあった

「魯周公世家」のそれは、「蒙恬伝」では「昔周成王初立、未離襁緥、周公旦負王以朝、卒定天下」とくわしくつづられている。周公は摂政としてではなく、三公の太傅として讒言をうけたとされているようなのである。とするとこれは、『墨子』の避居説のバリエーションといえるであろう。

以上の二点からまず、司馬遷の原拠資料には、周公の事跡においてその避居を不可欠とする考えが強くあったといえる。たださきにも指摘したように「金縢」一篇の確立、そして司馬遷が示すようなその解釈の定着によって、管叔の「流言」を契機とする避居は成立しえず、また摂政就任をめぐるそれも成立の余地がなかった。かくてさいど三公在任中の避居とし、「金縢」の設定を成王の病のばあいにおきかえて、避居説が作成されたのである。ただその際、避居の地として『墨子』の奄をそのままとすることはできなかった。『尚書』解釈において、奄は管蔡に反乱を教唆し、それゆえに周公による東征の一国ともされていたのである。<sup>(4)</sup>楚をそれとしたのは、僻地の楚が避居の地としてふさわしいと考えたからであろうか。とまれこのような避居説は捏造といってよいであろう。讒言した張本人を特定していないのは、そうしたことを示唆しているのである。

司馬遷は、右のような避居説を引いたのである。すなわ

ち、そのときを曖昧にしながらも讒言を契機とする周公の避居をつづったのである。

要するにわれわれは、前漢において周公のそれは否定されず、むしろ支持をうけていたことを見逃してはならない。そうしたことが後漢に継承されて、避居を装置するあらたな「金縢」解釈を生むのである。

### 三 古文学説の避居説

さて後漢におけるそれはまず、『尚書』の古文学説である。周知のように後漢になると、経伝にもとづきながら展開されるさまざまな学説が出現した。『尚書』のばあい、今文・古文の両テキストが併存していたこともあって、その学説にもふたつのそれがあった。このうち周公の避居は古文学説にのみ装置されたわけだが、さらにそれには二種の避居説があった。

第一の避居説は、「古文家」の学説である。『論衡』『感類篇』に引かれる「古文家以、武王崩、周公居攝。管蔡流言、王意狐疑周公、周公奔楚。故天雷雨、以悟成王」が、それである。前漢の避居説と異にして、周公の摂政就任・避居が管蔡の「流言」と関連づけられているのである。

「金縢」において管蔡の「流言」のまえにつづられる「武

王既喪」を武王の崩御と解すること、「流言」のあとにつづく「我之弗辟」という周公のことばの「辟」を「避」と解することによってこそ、このような学説は成立しうる。

とするとつづく「居東二年」は東に、避居して二年めと解されてしかるべきであろう。ところが南の楚に避居したという。「居東」は避居ととらえられていないのである。それは、このあとに「罪人斯得」という経文があるためである。すなわち「罪人」については管蔡以外のものを想定しえず、したがって連続する「居東二年」「罪人斯得」は東征と認めるべき経文であったのである。このようであると「古文家」が考える避居のときは、「流言」からその東征までのあいだということになるはずである。ただそれを設定しうるだけの時間的余裕があるだろうか。「古文家」の意図は、たとえ経文の文脈と齟齬をきたしても、避居を装置することにあったのである。このような態度がまた、その前例であった奄・楚から選ばれる避居の地の想定にも適用された。いまかりにそれを奄としてみよう。その地は東にあった。「居東」はそこへの避居と解されるおそれがある。それになによりも、奄は周公が東征した一国であったことは『詩』『毛伝』が明示しており、避居の地と認めえなかつたのである。かくて「古文家」は、経文に徴しえないに

もかわらず、のこった前例の楚と想定したのであるが、じつをいうと奄以外の地であればどこでもよかったのである。

さらに「古文家」の学説を論ずるためには、『史記』や前漢の解釈、そして後漢の今文学説を想起しなければならぬ。それらは、周公による「鷓鴣」制作のあとにつづく、天がくだす雷電疾風の異変をいう「秋、大熟、未穫。天大雷電（雨）以風、禾尽偃、大木斯拔」以下の「金縢」の経文を周公の卒後のことと認めるのである。これに対して「古文家」の学説では、その異変によって天は「流言」が全く根拠のないことを成王に悟らせた<sup>(5)</sup>とあった。すると「金縢の書」開封・周公迎候という成王の行為もまた、周公の生存中のことと考えるのが、その学説であったのである。ただそれらが、東征とどのような関係となっているかについてはよくわからない。この一点をおくと、鄭玄は基本的にこのような学説にしたがっているといえる。鄭玄もまた、雷電疾風の異変以後の経文を周公の生存中のことと認めていたのである。

ただ雷電疾風の異変に対する両者の解釈には、おおきな解釈の違いが存在する。「古文家」のそれは畢竟、周公には篡位の野心がないことを成王に告知する異変であった。

これに對して鄭玄のそれは、京師不在の周公の徳をあきらがにし、また成王に周公迎候を命ずる天意と解されていたことを想起しよう。このようなこともいま、確認しておかねばならないのである。

さて古文学説における第二の避居説をとりあげよう。人君の冠礼を説くにあたり、成王のばあいを例とする、許慎『五經異義』に引かれる「古尚書説」にわれわれは注目するのである。「武王崩時、成王年十三。後一年管蔡作乱、周公東辟之、王与大夫尽弁、以開金縢之書。時成王年十四。言弁、明知已冠矣」（公羊伝隠公元年疏引）とあるのがそれであるが、その叙述がまた譙周『五經然否論』では「武王崩、後管蔡作乱、周公出居東。是歳大風、王与大夫冠弁、開金縢之書。成王十四、是喪冠也」（通典卷五六引）とつづられていることにも留意しなければならない。成王をめぐるエピソードは、この両者によって補完しうるのである。すなわち人君は年十二にして冠するといふたちばに立ち、「金縢の書」を開封した十四歳の成王は喪冠の弁をつけていたと認めて、それまでの経緯をつぎのように考えるのである。成王十三歳のとき武王が崩じ、十四歳のとき管蔡の讒言があつて、周公は「東辟之」「出居東」を余儀なくされた。そののち成王は、「金縢の書」を開封した、と。

われわれは、右の傍点の表記に注目しよう。「金縢」の「我之弗辟」の「辟」に「居東」の「東」をくわえ、その「居東」には「出」をくわえるという操作がほどこされているのである。周公は「東」へ「出」、そこに「居」したというわけである。すなわち経文の「辟」は「出」と解されているのである。くわえてそれらを東征ととらえることによって生じる問題にも注目しよう。東征は管蔡の誅伐にかぎるものではなく、殷の武庚・奄などの壊滅も包括する軍事行動であつた。一年にも満たない期間では、それらはなしえないのである。「古尚書説」は、避居を裝置してゐるのである。われわれはさらにさきにみた、おなじ古文学説の「古文家」が避居を裝置したこともあわせて想起すべきであらう。またそこでは、管蔡の「流言」は周公の攝政就任を契機とするものであつた。この点についても「古尚書説」はおなじであつたらう。そうするとその避居説は、つぎのようにいえよう。武王崩御のとき成王は十三歳、その翌年の十四歳のとき即位する。それと同時に周公は攝政に就く。かくて管蔡の讒言をうけ、「東」に避居する。そして成王は弁をつけ「金縢の書」を開封する。こうした避居説には、周公の真意を告知し、成王を「金縢の書」開封へとうながす雷電疾風の異変、開封後の成王による周公迎

候が想定されていることは贅言するまでもないであろう。これら一連の出来事は、成王十四歳の一年のあいだのことであったのである。

このように「古尚書説」の避居説は、さきの「古文家」のそれとおなじく雷電疾風の異変以下の「金縢」の経文を周公生存中のこととするが、避居の地については異にする。「古尚書説」は畢竟、「居東」を避居と解したのである。これは鄭玄の避居説につながる解釈である。ただ問題は、その「居東」の「二年」をとりあげていないことである。もしそれを避居の年数とすると、つづく「罪人斯得」の解釈がやはり成立しえないのである。避居を装置するためには、そうした経文ばかりでなく、そのあとにさらにつづく周公による「鵠鵠」制作をめぐる経文も無視せざるをえなくなる。その経文は「罪人斯得」の解釈とふかく関わって解釈されるべきものであったからである。

#### 四 馬融の避居説

さてつぎに、馬融の『尚書注』をとりあげよう。それは今日、散佚してしまっているが、その断片から馬融の避居説は知りうるのである。

すなわちその断片として輯佚書が一致してとるのは、

『經典釈文』の「馬(融)鄭(玄)音避、謂避居東都」(卷四)という叙述である。これは「金縢」の「我之弗辟」の「辟」をとりあげ、それに「避」という訓詁をあたえたとともに、「居東二年」も視野にいれている解釈である。従来、こうした馬融・鄭玄の解釈をあわせる叙述に注目して、鄭玄の避居説はとくに馬融の『尚書』解釈にしたがうものと指摘されているようである。<sup>(8)</sup>だがしかし、そうした指摘は馬融の避居説が理解できていないといわざるをえない。われわれはかくて、馬融のそれをあぶりだすわけだが、そのまゝに四点ほど指摘しておかねばならない。

第一点は、馬融が文王の崩御を周の受命九年と認めていることである。このような見解は劉歆が「三統歴」に示して以来のものであり、漢魏、そして晋のおおかたが支持していたようである。<sup>(9)</sup>これに対して、少なくとも後漢においては鄭玄のみがその崩御を受命七年と認めていたのである。<sup>(10)</sup>

第二点は、『礼記』「文王世子」に「文王九十七乃終、武王九十三而終」とあること、『大戴礼』「文王世子」に「文王十三生伯邑考、十五生武王」(詩圖譜疏引)とあることである。これらに示される文王・武王の年齢設定は、漢魏において等しく認められていたものであり、馬融・鄭玄もそ

の例外ではない。とすると鄭玄をのぞくおおくのものたちは、つぎのように考えていたといえるであろう。文王が受命九年に九十七歳で崩じたとき、武王は八十三歳、そしてその武王が九十三歳で崩じたときは受命十九年である、と。

第三点は、成王が生まれた年である。馬融自身による見解はのこっていないが、「古尚書説」に「武王崩時、成王十三」とあったことを想起しよう。この年齢設定は、魏の王肅がとるものである。<sup>(12)</sup> その王肅はまた、文王の受命九年崩御説を主張する。<sup>(13)</sup> とすると馬融も、「古尚書説」にしたがっていたと認めてさしつかえないであろう。すなわち成王は武王八十歳のとき生まれ、文王崩御のときは三歳であったのである。

第四点は、周公の摂政就任のときである。これについても馬融自身による見解はのこっていない。ただそのときに「金縢」の「武王既喪」に対する解釈の問題としてとらえると、馬融の見解は推測できる。「古文家」がそれを武王の崩御と解していたことを想起しよう。また王肅の解釈にも注目しよう。「九十三而崩、以冬十二月。其明年称元年、周公摄政、遭流言」(詩幽譜疏引尚書注)とあり、武王が崩じた翌年に周公は摂政に就き、「流言」に遭ったと指摘す

る。王肅は避居説を否定するたちばに立つが、「武王既喪」の解釈については「古文家」のそれとおなじであったのである。さらにわれわれは、さきの『史記』『魯周公世家』も想起しよう。武王の崩後に摂政に就いた周公は「流言」に遭ったとパラフレイズした本文は、「武王既崩、成王少、……周公乃踐阼、代成王攝行政当国、管叔及其羣弟流言於国」であった。ここでは「武王既喪」が「武王既崩」にいいかえられているのである。要するに避居の有無のいかんを問わず、周公の摂政就任は武王の崩後であることは共通しており、また「流言」はその就任を契機とすることと一致しているのである。漢魏において以上が大勢を占めていたとすると、鄭玄の解釈はすぐれて特異であったといわねばならない。鄭玄は「武王既喪」を、武王のための三年の喪期があけたとき、周公は摂政に就こうとしたと解していた。「既喪」を「終喪」を読んだのである。もし馬融が鄭玄とおなじ解釈をとっていたとするならば、その特異性のゆえに『經典釈文』が示す「辟」の訓詁のばあいのように、馬融の解釈は鄭玄のそれと併記されてしかるべきであらう。しかしそれを取りあげるはずの孔穎達『尚書正義』(金縢疏)『毛詩正義』(幽譜・幽風疏)は鄭玄の解釈を示すのみである。以上のようにであると、馬融も「古文家」・



王肅などのように解していたと認めてもよいであろう。

以上の四点に、周公の東征はまる三年、その居撰は七年とする定説をくわえて、成王の生誕から居撰七年までの年譜を作成しよう。ただその際、馬融の避居説が鄭玄のそれの大本であったとの指摘にあえてしたかうこととする。すなわち鄭玄のそのように、避居三年を東征一年とし、その東征を避居に連続させるのである。とすると、

受命六年	文王九四	武王八十	成王生
受命九年	文王九七崩御	武王八三	成王三
受命十九年	武王九三崩御		成王十三
受命二十年	居撰元年	避居一年	成王十四
受命二十一年	居撰二年	避居二年	成王十五
受命二十二年	居撰三年	避居三年	東征一年
受命二十三年	居撰四年		成王十六
受命二十四年	居撰五年	東征二年	成王十七
受命二十五年	居撰六年		成王十八
受命二十六年	居撰七年	致政	成王十九
			成王二十

といった年譜を作成しうる。一見してあきらかなように、七年の居撰のあいだの周公の事跡を組み入れることは、この年譜では不可能といえるであろう。たとえば異説がない三年の新都洛邑の造営の着手、六年の「制礼作樂」の完成などは東征にあたっているのである。これに対して鄭玄の

避居説がそれらを組み入れ、また武王のための三年の喪期も設定しえたのは、さきに指摘したように文王の崩御を受命七年と認めたからであったのである。すなわち馬融の避居説は、避居のあとに東征をつづける鄭玄とおなじ文脈にはおきえない異質な避居説であったのである。とすると馬融のそれは、つぎのように避居と東征とを重ねていたと認める以外にはないであろう。

「金縢」の「辟」を「避」と読み、その經文を周公の避居の決意表明とし、その地を「居東」とあることから東都とした。そしてそこへの避居と同時に東征はおこなわれたと馬融は考える。このようにその意をとらえてこそ、馬融も「罪人斯得」の「罪人」を管蔡と解しうるのである。避居のあとに東征をつづけ、両者に別なる時間を想定すると、「罪人斯得」の解釈は放棄せざるをえないのである。要するに馬融が構想する受命十九年以後の年譜は、

受命十九年	武王九三崩御	成王十三
受命二十年	居撰元年	避居一年
受命二十一年	居撰二年	東征一年
受命二十二年	居撰三年	避居二年
受命二十三年	居撰四年	東征二年
受命二十四年	居撰五年	避居三年
受命二十五年	居撰六年	東征三年
受命二十六年	居撰七年	致政
		成王二十

受命二年 居攝六年 制礼作樂完成

受命二年 居攝七年 致政

成王十九  
成王二十

であったはずである。こうした年譜から避居の装置をとりはずそう。さきの四点の指摘から容易に知れるように、その年譜は王肅の構想とまさに合致しているのである。<sup>(15)</sup> われわれは、馬融の避居説を鄭玄のそれと同列にあつかうことなどできないのである。

## むすび

先秦から後漢にいたる避居説は、以上のようである。<sup>(16)</sup> 鄭玄の避居説と共通する要素を有していたのは、後漢のそれであったのである。すなわち「金縢」の「我之弗辟」の「辟」を「避」と読み、管蔡の「流言」を避居の契機として、周公の摂政就任をめぐる避居説を構想すること、成王による「金縢の書」開封以下の経文を周公の生存中の出来事とすることにかぎって、両者は共通するのである。鄭玄は後漢のその基本的な枠組みについては、おそつていえるのである。

ここでわれわれは、そうした後漢の避居説をふりかえってみよう。

古文学説にふたつの避居説が存在したのは、避居を装置

することと、「居東二年」「罪人斯得」の解釈とが両立しないからであった。馬融の避居説は畢竟、このような問題を解消した解釈といえるであらう。「居東」を東都への避居と解する一方で、「罪人斯得」を管蔡誅伐とし、「二年」をその誅伐の年―東征二年とも認めることによって、古文学説を整理したのである。さらにまた、古文学説がその解釈を放棄せざるをえなかった、周公による「鷓鴣」制作も馬融のそれは解釈の射程に入るものとなった。「鷓鴣」は、管蔡誅伐の周公の意図をあきらかにする詩篇ととらえるのである。これが漢魏において、等しく支持されていた「鷓鴣」解釈でもあったのである。だがしかし、「金縢」において「居東二年、則罪人斯得」とつづられている両者に別なる解釈をあたえたことはやはり、不自然といわねばならない。「金縢」に避居を装置して齟齬をきたさない解釈を成立させることは、不可能な作業であったのである。

これに対して、「金縢」解釈としての鄭玄の避居説は整合性があるかのようなものである。しかしそれには、すぐれて特異な解釈をほどこす必要があった。小稿で言及したそれを確認すると、文王の崩御を周の受命七年とすること、「罪人」を周公の属党とし、成王によるその逮捕に対する異議申し立てを周公の「鷓鴣」制作の意図とすること、したが

って管蔡誅伐をはじめとする東征を「金縢」解釈に設定しないこと、そして雷電疾風の異変に対する解釈などが、それである。

以上のようにであると、鄭玄の避居説は古文学説・馬融とは全く異なった次元に立つそれと指摘しなければならぬ。すなわちつぎのように考えられるのである。居撰六年の「制礼作樂」は周公になる「太平」国家のプランにほかならず、東征をおえた居撰三年の翌年―居撰四年こそ、その「太平」到来のときである。鄭玄はこうした想定にもとづき、さかのぼって避居を構想したのである。鄭玄の避居説は単なる「金縢」解釈ではなく、かれ独自の「太平」思想から導きだされたものであったのである。

#### 注

(1) たとえば孫星衍『尚書今古文注疏』(卷十三)に、そのような認識をうかがいうる。

(2) 以下の鄭玄が構想する周公避居説の詳細は、拙稿「流言と避居―周公の受難―鄭玄の『尚書』『金縢』解釈―」(日本中国学会創立五十年記念論文集 一九九八年十月) 参看。

(3) 孫詒讓『墨子閒詁』(卷十一) 参看。また馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』(卷十六) にも同様な指摘がある。ただ「東処於商蓋」について、孫詒讓は避居とは解せず、周公が東征して奄を誅伐し、その地に居たことを指すという。とすると管叔の讒言を装

置しながら、その管叔誅伐を明示せずに、一連の軍事行動である東征において最後の決戦であるはずの奄誅伐と認めるのは不自然であろう。孫詒讓は避居説を否定するあまり、のちの『尚書』解釈のなかで成立する東征に強引に結びつけたのである。汪中「周公居東證」(述学所収) や前掲孫星衍書なども、それを避居と解しているのである。

(4) たとえば『尚書大伝』は、居撰七年間における事跡を指摘して「周公攝政、一年救乱、二年克殷、三年踐奄」(隋書李德林伝等引) 云々という。さらにそれには「武王殺紂、而継公子禄父。……武王死、成王幼、周公盛、養成王。……周公身居位、聽天下為政。管叔疑周公、流言於国。……奄君薄姑謂禄父曰、武王已死矣。成王幼、周公見疑矣。此世之時也。請舉事。然後禄父三監叛。周公以成王之命殺禄父、遂踐奄」(太平御覧卷六四七・詩破斧疏等引) とある。これによると、管蔡らの反乱は奄君が教唆したということになる。また「周公以成王之命殺禄父、遂踐奄」は、さきの「二年克殷、三年踐奄」に相当するのである。なお『尚書大伝』の引用は、陳寿祺『尚書大伝輯校』を参看したことをこわっておく。

(5) 『詩』『國風・破斧』の「周公東征、四国是皇」に対して、「毛伝」は「四国、管・蔡・商(殷)・奄也。皇、正也」と注する。『白虎通』「巡狩篇」などが黜陟と解するのと異にして、「四国」討伐、すなわち小稿という東征と認めているのである。

(6) 小稿が雷電疾風の異変という経文の表記は、古文では「雷電、以風」につくるに對して、今文では「雷雨、以風」につくる。

(7) 前漢の解釈としては、たとえば『尚書大伝』にいう「周公疾。曰、吾死必葬於成周、示天下臣於成王也。周公死、天乃雷雨以風、禾尽偃、大木斯拔、国恐。王与大夫開金縢之書、執書以泣。曰、周公勤勞王家、予幼、人弗及知。乃不葬於成周、而葬之於畢、示天下不敢臣」(漢書梅福伝注等引)をあげることが出来る。後漢の今文学説は、『論衡』『感類篇』に「金縢曰、秋大熟、未穫、天大雷雨以風、禾尽偃、大木斯拔、国人大恐。当此之時、周公死。儒者説之、以為成王狐疑於葬周公。欲以天子礼葬公、公、人臣也。欲以人臣礼葬公、公有王功。狐疑於葬周公之間、天大雷雨、動怒示變、以彰聖功」とあるのがそれである。なお『論衡』の引用は、黄暉「論衡校釈」を参看したことをことわっておく。

(8) たとえば黄焯『毛詩鄭箋平議』は、「鄭必分為二事(居東・東征)者、以金縢云我之弗辟、依馬融説辟為避。故解為避居東都」(卷四)と指摘する。

(9) 『詩』『大雅・文王』序疏に「尚書武成篇曰、……惟九年、大統未集。孔安国云、言諸侯歸之、九年而卒。故大業未就。劉歆作三統歷、考上世帝王、以為文王受命九年而崩。班固作漢書律歴志、載其説。於是賈逵・馬融・王肅・韋昭・皇甫謐皆悉同之、則毛意或当然矣」とある。「偽孔伝」ではなく、劉歆以来の説であつたことはいふまでもなからう。

(10) 鄭玄の「金縢」注に「文王、……九十七而終。……於文王受命為七年」(詩圖譜疏引)とある。

(11) 注(13)をみよう。

(12) 王肅は「金縢」に注して、「文王十五而生武王、九十七而終、時受命九年」(詩圖譜疏引尚書注)という。

(13) 右の本文に引いた「金縢」注は、「作大誥而東征、二年克殷、殺管蔡、三年而帰、制礼作樂、出入四年、至六年而成。七年宮洛邑、作康誥・召誥・洛誥、致政成王。然則文王崩之時、成王已三歳、武王八十而後有成王。武王崩時、成王已十三、周公攝政七年致政、成王年二十」(同上)とつづく。周公の避居は裝置されていないのである。また王肅「毛詩注」にも注目しよう。そこでは「金縢」の「罪人斯得」を周公の属党とする、鄭玄の「鵠鵠」解釈を王肅は激しく論駁する(詩圖譜疏引)。これは鄭玄の避居説を批判の俎上にのせていることにほかならないのである。

(14) このように設定すると、成王の生年は受命八年、武王八十四歳のときということになる(詩圖譜疏引尚書注)。これも古文学説とは異なるのである。

(15) 本文・注で示した王肅「金縢」注によって年譜を作成すると、

受命六年	文王九四	武王八十	成王生
受命九年	文王九七崩後	武王八三	成王三
受命十九年	武王九三崩御		成王十三
受命二十年	居攝元年	流言	大誥制作
	東征一年		成王十四
受命二十一年	居攝二年	東征二年	克殷
	管蔡誅伐		成王十五

受命二二年 居撰三年 東征三年 京師帰還

制礼作樂着手

成王十六

受命二五年

居撰六年 制礼作樂完成

成王十九

受命二六年

居撰七年 宮洛完成 康誥召誥洛誥制作

致政

成王二十

となる。このような年譜によっていつそうあきらかとなる一点がある。雷電疾風の異変が組みこまれていないことである。また王肅『毛詩注』にも、それを視野に入れる解釈はない。さらに王肅が依拠したと認めうる『毛詩詁訓伝』すなわち「豳風」七篇に対する「毛伝」にもそれは位置づけられていないのである。このようであると、孫星衍前掲書の見解は傾聴するに値しよう。「金縢」の「秋大熟」以下、篇末までは、周公の死後のことがつづられていた「亳姑」一篇の佚文であるというのである。王肅の解釈とともに、このことについてもあらためて論じる必要がある。

(16) 後後漢における避居説は以上のほかに、袁康『越絶書』の「越絶呉内伝」、蔡邕『琴操』の佚文(太平御覧卷八四)にもうかがいうる。まず後者のそれは、管蔡誅伐のちに摂政に就任した周公はあるものの讒言をうけ、魯に避居してそこで卒するというものである。また雷電疾風の異変は周公卒後のこととし、今文学説にしたがう。前者のそれは、基本的には古文学説の枠組みに沿う。そうしたなかで注目すべきは、管蔡の讒言の契機とされている、摂政就任時の周公の政治である。それは「太平」の政治といえるものであり、鄭玄が構想する周公の政

治との共通性を認めうる。このようであると、後者は小稿では深入りする必要はなく、前者についてもやがてとりあげる鄭玄の「太平」思想とのかかわりにおいてこそ論すべきであろう。

(香川大学)